

## 新潟県岩船郡における歴史的建造物群の残存状況と外観特性

—下越地方の街道沿いを対象として (その1)—

REMAINING CONDITION AND APPEARANCE CHARACTER OF HISTORIC BUILDINGS  
IN IWAFUNE GUN, NIIGATA PREFECTURE

—A case of towns and villages along historic roads in Kaetsu area Part 1—

佐藤 憲明\*, 岡崎 篤行\*\*

Noriaki SATO and Atsuyuki OKAZAKI

The purpose of this paper is to clarify how historic buildings in Iwafune-gun remain and to understand appearance character of those buildings. This is to make a basic report for expected district designation and establishment of design guidelines. Major results are as follows: 1) 2885 historic buildings were counted, 2) Murakami, Shioya, Senami, Ogoto, Ebie, Sarusawa show high remaining percentage and large number of historic buildings, 3) The form alike town houses in Kansai region only appears in Murakami and Senami, 4) Today, Yokoya-type of town houses is the majority, but in the past, Tateya-type was likely to be the majority, (5) There are common characteristics in facade design along some roads and in some areas.

Keywords : Historic Buildings, Remaining condition, Town house, Tateya, Yokoya, Niigata Prefecture

歴史的建造物、残存状況、町屋、塙屋、横屋、新潟県

## 1. 研究の背景と目的

地方都市では、高齢化・過疎化が進み、歴史的建造物の維持管理は難しくなり、建物の放棄や建替えが行われ、その数は年々減少している。民家については以前から各地で多くの調査・研究が行われており、広域における外観特性も研究されている。一方、町屋は調査の実施件数は多いが、広域における外観特性の研究は少ない。このままでは数年後には町屋の広域における外観特性を把握できないまま、大部分の町屋が消えてしまう恐れがある。

その中で大場の研究<sup>1)</sup>では、中部・近畿・中国・九州地方を中心に全国の町屋の平入りと妻入りの分布と相互関係について調べており、東北地方の日本海側は妻入り、北陸地方は平入りが多いと述べているが、その中間である新潟県は平入り、妻入りが混在しており、また新潟県の対象地が少なく、明確な特徴が把握されていない。

新潟県では、新潟、村上、高田、出雲崎などで町屋の研究<sup>2)</sup>はあるが、間取りが主で外観特性の研究は少ない。また鈴木・山崎らは町屋の棟の向きの研究<sup>3)</sup>をしているが、調査地は県内の主要都市のみで、網羅的に調べておらず、また対象は航空写真と現地調査から抽出しているものの、サンプルには戦後の新しい建物も含むため、調査結果が在来の町屋の棟の向きとは言い難い。

本研究は、将来的に新潟県全域を調査する予定であるが、今回は最北に位置する下越地方の岩船郡とその周辺を調査範囲とし、町屋

が存在したと推測される街道沿いの集落において、歴史的建造物の残存状況、その主屋の外観特性、広域における町屋の外観特性、地域固有の意匠を把握し、今後、歴史的遺産を活かしたまちづくりを

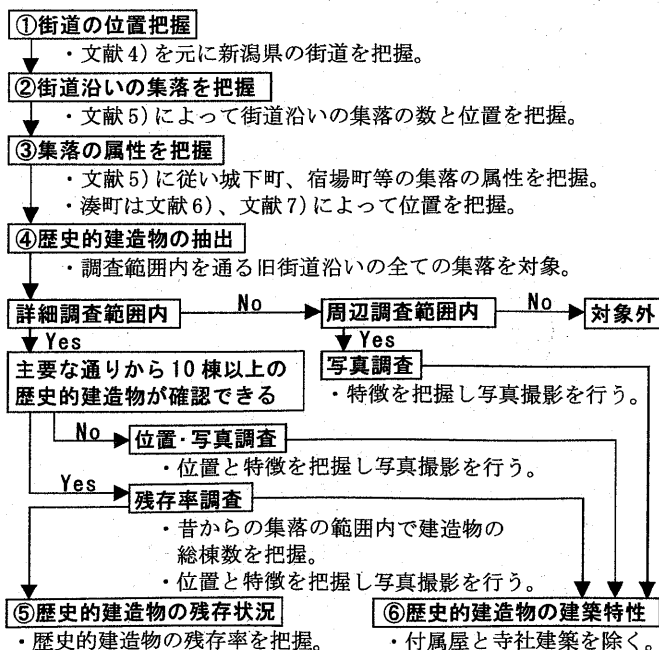


図1 研究の流れ

\* 新潟市役所 修士(工学)

\*\* 新潟大学工学部建設学科 助教授・博士(工学)

Shibata City Government, M. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Civil Eng. and Arch., Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr. Eng.

行っていく上で、重点的に保全すべき集落の把握と景観保全のデザインガイドラインの基礎的資料の作成を目的とする。

## 2. 調査概要

### (1) 調査対象地概要

岩船郡は新潟県最北端に位置し、近世は村上藩を中心とした地域で、主な街道は城下町村上を結節点として出羽街道山通り、出羽街道浜通り、米沢街道、北国街道浜通り、三国街道中通りが存在した。また海の道では荒川三湊や瀬波、岩船など北前船寄港地があった。

### (2) 調査方法(図1)

文献4)で街道の位置、文献5)で街道沿いの集落位置、文献5)・文献6)・文献7)より集落の属性を把握する。次に街道沿い全ての集落に行き、歴史的建造物を通りから傍観できる範囲で判別し、またヒアリングや内部確認などを補足的に行い、抽出する。本研究における歴史的建造物とは、日本の伝統建築や近代建築など、戦前に建てたと思われるものとし、土蔵や小屋などの付属屋も戦前に建てられたと判別した場合、含んでいる。

岩船郡と北蒲原郡<sup>注1)</sup>の一部を詳細調査範囲(図2)とし、周辺の外観特性も把握するため北蒲原郡北部と新潟県境付近の山形県の主要集落を周辺調査範囲とする。詳細調査範囲は主要な通りから10棟以上の歴史的建造物が確認できた場合は残存率調査<sup>注2)</sup>、10棟未満の場合は位置・写真調査<sup>注3)</sup>を行う。周辺調査範囲では写真調査<sup>注4)</sup>を行う。

調査項目<sup>注5)</sup>は、配置形態、構造、階高、屋根形状、棟の向き、棟

形状、玄関位置・方角、軒形式、下屋の有無、葺き材料、外壁材料、破風の化粧の有無、水切り板<sup>注6)</sup>の有無、マグサの有無で調べた。

調査期間は、村上を平成13年10月～12月に調査し、残りの街道沿いの集落は平成15年10月～1月で行った。

## 3. 歴史的建造物の残存状況

### (1) 調査対象集落の概要

調査した街道沿いの集落は130集落で、歴史的建造物と思われるものは2,885棟を推定した<sup>注7)</sup>。城下町の村上は街道が通る旧町人町を対象としたため、旧武家町の歴史的建造物は対象には含んでいない。

### (2) 集落の規模別の残存率と残存棟数(図3)

図3は集落の総建造物数によってクラス分けをし、各クラスで残存率が高い集落の上位5つを表したものである。10棟～99棟クラスでは釜杭が40.0%と最も高い。次に100棟～199棟クラスでは猿沢が35.1%と最も高い。200棟～399棟クラスでは瀬波が37.1%と最も高い。400棟以上クラスでは、村上が28.6%と最も高く、次いで塩谷が25.3%であった。また残存率が高く、残存棟数も多い集落は、村上、塩谷、瀬波、大毎、海老江、猿沢であった。

### (3) 街道別の残存率(図4)

各街道ごとの残存率を比較する。ただし村上は街道の結節点のため、どの街道にも含めていない。まず柳生戸越が26.6%と最も割合が高く、次いで出羽街道山通りの23.0%、三面越の20.9%である。山間部を通るこれら三つの街道は残存率が高く、特に釜杭・猿沢・大

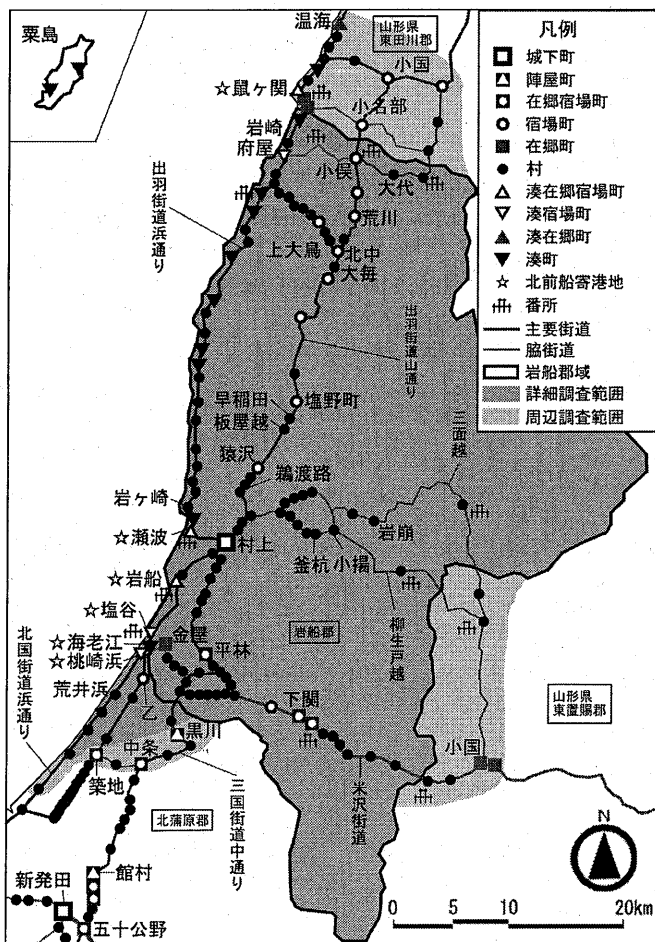


図2 岩船郡を通る街道と街道沿いの集落分布図

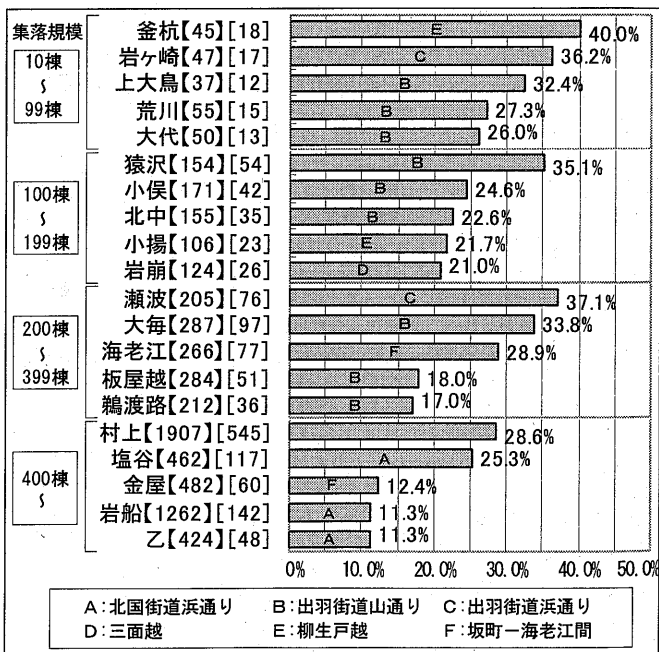


図3 集落の規模別残存率(※【 】は総建造物数、[ ]は歴史的建造物数)

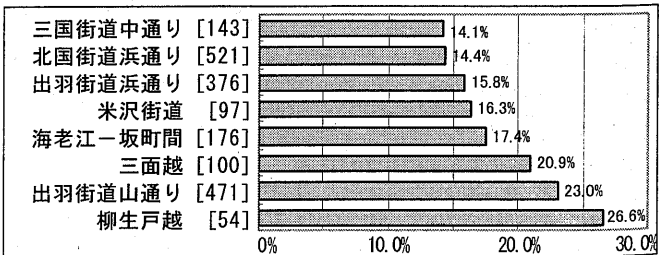


図4 街道別の残存率(※図中の【 】内は歴史的建造物数)

毎、上大鳥の残存率が高い。一方、海岸部を通る出羽街道浜通りは15.8%、北国街道浜通りは14.4%と残存率が低かった。また平野部を通る三国街道中通りが14.1%と最も残存率が低かった。海岸部の街道の残存率が低い傾向にあるが、その中でも瀬波は37.1%と塩谷は25.3%と残存率が高いことがわかった。

#### 4. 歴史的建造物の外観特性

##### (1) 歴史的建造物の主屋外観のタイプ分類(表1)

歴史的建造物の主屋についての外観特徴を把握するため、歴史的建造物と思われる2,885棟のうち、近代建築と寺社建築を除いた主屋1,828棟を、景観上重要な指標である配置形態、棟の向き、階高、下屋有無<sup>※)</sup>で分類した。

配置形態は、町屋型と屋敷型に分けた。町屋型は、道路と接しているか、又は若干セットバックしていて、建物の前面に玄関があり、隣家との間が狭いものとした。屋敷型については、道路から奥まり、隣家との間が広いもの、又は道路と接していても、建物の側面に玄関があり、隣家との間が広いものとした。通り土間の有無などの間取りは別とし、接道、接隣で分類している。

棟の向きは、大棟が通りと直交していれば縦屋、平行であれば横屋、道路側が横屋で奥側の棟が縦屋をしていれば横縦混在<sup>※)</sup>の3つに分けた。また縦屋・横屋は大棟と通りとの位置関係を示すものであるが、平入り・妻入りは大棟と入口の位置関係を示すものとした。

各タイプで50棟以上あったものを抽出すると、9タイプに分類された。その結果、町屋横屋二階型のタイプが402棟と最も多く、また村上と瀬波がその大部分を占めることがわかった。次に多いタイプは屋敷横屋二階型で294棟を確認した。

- 1) 屋敷縦屋平屋型(図5): 屋敷型で縦屋平屋の形態で74棟を推定した。荒井浜や藤塚浜など北国街道浜通り沿いの集落でよく見られる。
- 2) 屋敷縦屋二階型(図6): 屋敷型で縦屋二階建ての形態で192棟を推定した。海岸部の街道沿いと三国街道中通りや出羽街道山通り沿いの集落で見られる。

表1 歴史的建造物のタイプ分類(※村上の占める棟数)

配置形態	棟の向き	階高	タイプ	棟数
屋敷型	縦屋	平屋	屋敷縦屋平屋型	74
		二階	屋敷縦屋二階型	192
	横屋	平屋	屋敷横屋平屋型	67
		二階	屋敷横屋二階型	294
町屋型	縦屋	平屋	町屋縦屋平屋型	99
		二階	町屋縦屋二階型	186
	横屋	二階	町屋横屋二階型	402 (※260)
		二階	町屋横屋二階下屋無型	194 (※135)
		二階	横縦混在二階型	94
	横縦混在	二階	横縦混在二階型	94

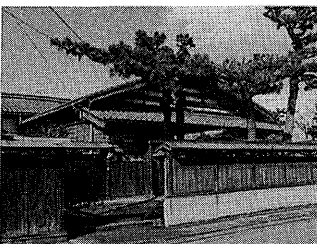


図5 屋敷縦屋平屋型(荒井浜)

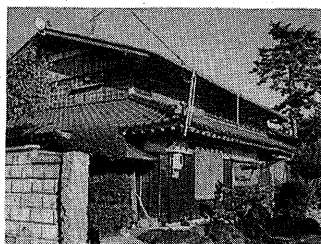


図6 屋敷縦屋二階型(海老江)

- 3) 屋敷横屋平屋型(図7): 屋敷型で横屋平屋の形態で67棟を推定した。出羽街道浜通りの岩崎などで見られる。

- 4) 屋敷横屋二階型(図8): 屋敷型で横屋二階建ての形態で294棟を推定した。主に山通り、三面越道、柳生戸越道、三国街道中通りと海老江一坂町間の通り沿いの集落で見られる。このタイプの

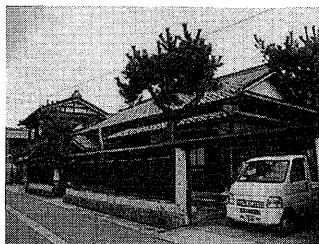


図7 屋敷横屋平屋型(岩崎)

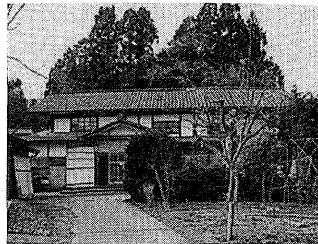


図8 屋敷横屋二階型(板屋越)

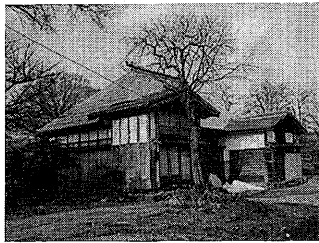


図9 中門造り(早稲田)

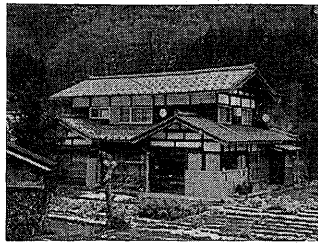


図10 出が浅い中門造り(荒川)

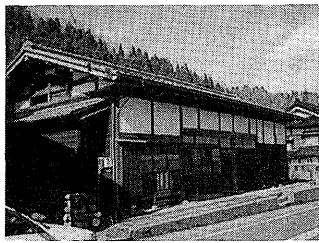


図11 小俣周辺で見られる形態

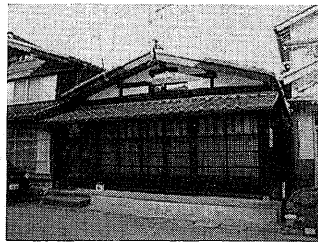


図12 町屋縦屋平屋型(塩谷)



図13 町屋縦屋二階型(平林)

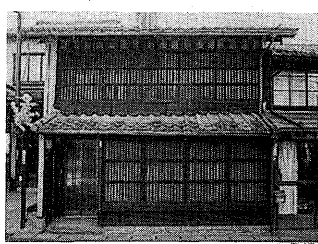


図14 町屋横屋二階型(村上)



図15 奥行きが長い横屋(村上)



図16 奥行きが短い横屋(小俣)



図17 町屋横屋二階下屋無型(瀬波)

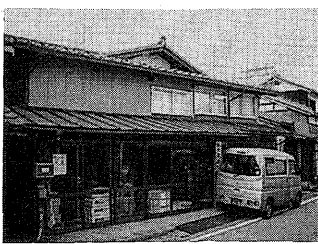


図18 横縦混在二階型(下関)

中には、建物の前面に突出部がある中門造り(図9)、突出部の出が浅い中門造り(図10)があり、また数は少ないが下屋が無く、玄関が奥まった形態(図11)で小俣周辺の集落のみで見られるものもあった。

7) 町屋縦屋平屋型(図12): 町家型で縦屋平屋の形態で99棟を推定した。主に塩谷、藤塚浜など北国街道浜通り沿いの集落で見られる。

8) 町屋縦屋二階型(図13): 町家型で縦屋二階建ての形態で186棟を推定した。三国街道中通りの平林、出羽街道山通りの猿沢、海岸部の街道沿いの集落で見られる。

9) 町屋横屋二階型(図14): 町家型で横屋二階建ての形態で402棟を推定した。そのうち村上は260棟、瀬波は39棟と大部分を占める。次に奥行ききの形態について見ていく。正確な数は把握できていないが、村上と瀬波の横屋の町屋は、奥行きが長く、大屋根が奥までかかっている形態(図15)で、関西町屋の形態とよく似ている。一方、村上と瀬波以外の横屋の町屋(図16)は、間口が大きく、奥行きが短い形態で、農家の要素が入った町屋である。このことから村上と瀬波の横屋の町屋は、周辺集落の横屋の町屋と比べて異なる形態であり、この地域では特殊であるといえる。

これは村上が近世に城下町として新しく造られた都市であり、また城主が播磨姫路から9代(1667年)、10代(1683年)、12代(1709

年)、河内から17代(1725年)<sup>註10)</sup>と関西から何度も入封し、その際に配下の武士や町民を連れてきていることから、在来とは異なる関

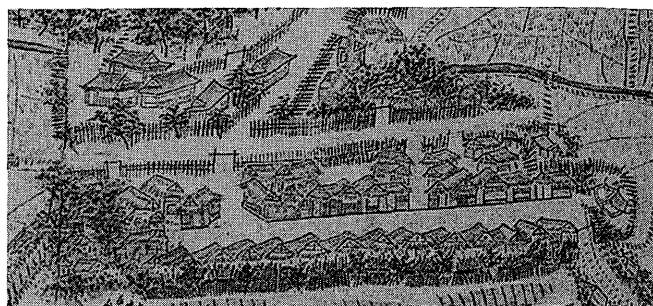


図20 慶長2年(1597)の村上城下の様子<sup>10)</sup>

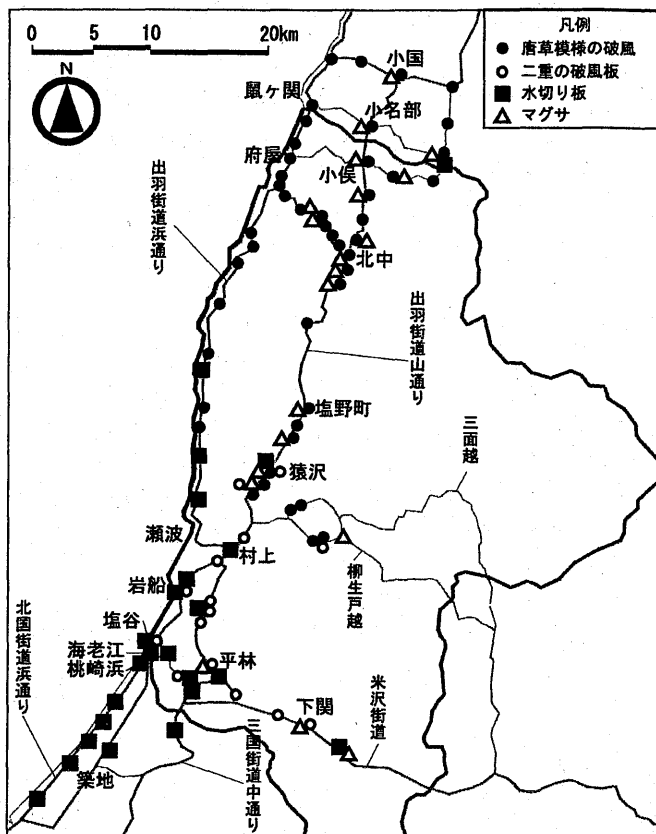


図21 細部意匠分布図

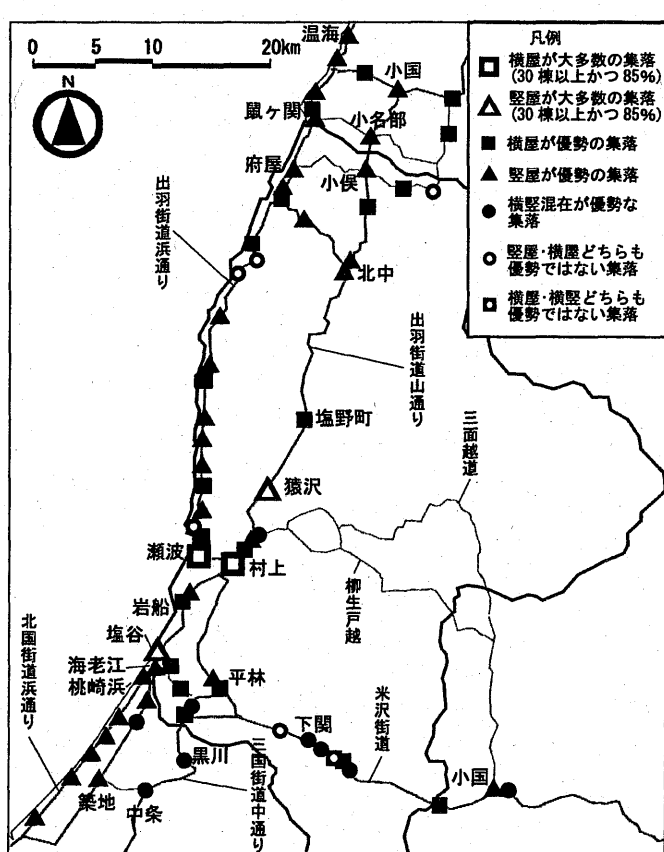


図19 集落別でみた町家型の棟の向きの分布図

表2 集落別の建築的特性の主流要素(屋敷型119集落、町家型67集落)

	階高		屋根形状							棟の向き						
	平屋	二階	平屋二階同数	切妻	入母屋	寄棟	切妻入母屋同数	切妻寄棟同数	入母屋寄棟同数	横屋	縦屋	横縦混在	横屋横縦同数	横屋横縦同数	横屋横縦同数	横屋横縦同数
屋敷型	21	93	5	104	9	3	1	1	1	68	37	—	11	3	1	1
町屋型	10	54	3	62	1	2	1	1	—	20	32	8	5	1	1	1



図22 唐草模様の破風(上大鳥)



図23 二重の破風(岩船)

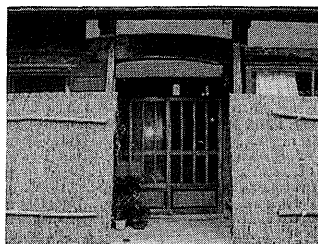


図24 マグサ(北中)



図25 水切り板(塩谷)

西系の建築文化が移入され、関西町屋に似た形態となった可能性がある。瀬波については、村上の外港の役割を果たしていたことから村上と同形態の町屋が造られたと推測される。

10) 町屋横屋二階下屋無型(図17): 町屋横屋二階型で下屋がなく、形態で194棟を推定した。町屋横屋二階型と同様に、村上には135棟、瀬波は27棟と大部分を占める。

11) 横堅混在二階型(図18): 建物の道路側の棟が横屋、奥の棟が堅屋の形態で94棟を推定した。下関付近で多く見られ、この辺りでは撞木造りと呼ばれ、山形県小国でも確認できた。米沢街道沿いとそれに接続する北国街道浜通り、三国街道中通り沿いの集落にも見られる。堅屋の道路側部分を横屋に改造<sup>注11)</sup>したといわれている。

#### (2) 集落別の屋敷型と町家型の外観特性(表2)

各集落の歴史的建造物の主屋を屋敷型と町屋型で分け、外観特性を見ていく。屋敷型が存在する集落は119集落、町屋型は67集落あった。各項目で最も多い特徴をその集落で優勢な特徴とした。

1) 構造: 全て木造であった。

2) 階高: 屋敷型では二階建てが優勢な集落が93集落、町屋型では54集落あり、共に過半数の集落を越えており、この地域の屋敷型、町屋型共に二階建てが優勢である集落が多い。また平屋では屋敷型、町屋型も北国街道浜通りに多く分布していた。

3) 屋根形状: 屋敷型では切妻が優勢の集落が104集落、町屋型は62集落あり、過半数の集落を超えていることから、この地域は屋敷型、町屋型共に切妻が優勢な集落が大半を占める。

4) 屋敷型の棟の向き: 屋敷型の棟の向きは、横屋が優勢の集落は68集落で過半数を占め、堅屋が優勢の集落は37集落であった。この地域の屋敷型は横屋が優勢の集落が多いといえる。

5) 町屋型の棟の向き: 図19のように堅屋と横屋のどちらが優勢か、また横屋が大多数を占める集落(横屋が30棟以上かつ85%以上占める)、堅屋が大多数を占める集落(堅屋が30棟以上かつ85%以上を占める)をプロットした。

横屋が優勢の集落が20集落、堅屋が優勢の集落が32集落、また横堅混在が優勢の集落は8集落あった。横屋が優勢な集落は出羽街道山通りに多く、堅屋が優勢な集落は主に北国街道浜通りと出羽街道浜通りに多かった。また横堅混在が優勢な集落は米沢街道と三国街道中通りに多いこともわかった。横屋が大多数を占める集落は村上と瀬波だけで、堅屋が大多数を占める集落は猿沢と塩谷だけであった。

村上と瀬波の横屋は、周辺集落の横屋とは形態が違うことから、これらを除くと、横屋が大多数を占める集落はなくなり、また表1から横屋の町屋より堅屋の町屋の棟数が増えることがわかる。そして現在、横屋が大多数を占める村上は、近世初期に描かれた絵図(図20)を見ると堅屋の建物が描かれている。これらのことから、建物の年代判定をしていないので推測ではあるが、昔は堅屋が優勢な集落が多く、この地域の町屋は堅屋が主流であると推測される。

#### (3) 細部意匠(図21)

細部意匠の項目は、この地域の集落を分析するのに重要なものと判断した項目を抽出している。

1) 唐草模様の破風(図22): 破風の先端を雲模様削り、また表面は唐草模様を彫りこみ白く化粧し、破風の下端にも白く化粧する特徴がある。この三つの要素のうち一つでも見られた場合、プロットしてある。岩船郡北部に多く見られ、主に山形街道山通りと山形街道浜

通り沿いの集落に見られ、山形県境を越えた集落にも見られる。

2) 二重の破風(図23): 破風が二重になっているものが岩船で多く見られ、他に平林、下関などでも見られる。

3) マグサ(図24): 玄関の上部に渡してある水平材、この地域では湾曲した材を用いている。出羽街道沿いの山形県境付近の集落と平林、下関、下川口などで見られた。海岸部には全く見られなかった。

4) 水切り板(図25): 下屋と上屋上の壁面との接合部にある斜めの下見板のことで、北国街道浜通り沿いの集落に多く見られ、屋敷型平屋型と町屋型平屋型によく見られる。

## 5. まとめ

(1) 残存率が高く、残存棟数も多い集落は、村上、塩谷、瀬波、大毎、海老江、猿沢であった。また山間部の街道沿いの集落は残存率が高く、特に釜杭、猿沢、大毎は残存率が高い。一方、海岸部の街道沿いの集落は残存率が低い、瀬波と塩谷は残存率が高い。これらの集落は歴史的建造物が多く残る特に重要な集落といえる。

(2) 岩船郡とその周辺における歴史的建造物の主屋外観を町並み景観上重要な指標である配置形態、棟の向き、下屋の有無で分類すると、結果として9タイプに設定された。その中で町屋横屋二階型が一番棟数が多く、村上と瀬波がその多くを占めている。しかし、村上と瀬波の町屋は奥行きが長く、大屋根が奥までかかっている形態で、関西町屋の形態とよく似ており、また周辺集落の横屋の町屋と比べて異なることから、この地域では特殊な形態であることがわかった。

(3) 岩船郡とその周辺における屋敷型は木造二階建て・切妻横屋が優勢である集落が大部分である。町屋型は木造二階建て、切妻が優勢な集落が多い。棟の向きについては、現在は横屋が優勢な集落もよく見られるが、昔は堅屋が優勢な集落がもっと多かったと考えられ、この地域の町屋は堅屋が主流であると推測される。

(4) 唐草模様の破風は、岩船郡の北部と山形県境の地域だけに分布している。二重の破風は岩船郡中部と南部に分布している。マグサは出羽街道山通り沿いに分布している。水切り板は岩船郡南部と北国街道浜通りに多く分布している。このように岩船郡内だけでも街道や地域によって細部意匠に違いがあることがわかった。

## 謝辞

本研究を行うにあたりご協力いただいた、岩船郡内の行政の方々、街道沿いの集落の住民の方々に厚く御礼申し上げます。

## 注

注1) 市町村合併により、現在は北蒲原郡は聖籠町のみであるが、本研究は調査時の北蒲原郡とする。

注2) 集落における残存率とその位置、特徴を把握し、写真撮影する調査。

注3) 位置と特徴を把握し、写真撮影する調査。

注4) 主屋のみの特徴を把握し、写真撮影をする調査。付属屋や寺社建築は含まない。

注5) 今回は配置形態、構造、階高、屋根形状、棟の向き、棟形状、下屋の有無、破風の化粧の有無、水切り板の有無、マグサの有無で分析した。

注6) 文献8) p70で当部材の名称が地元大工でも分からなかったため、村上のナショナルトラスト調査時に水切り板と名付けられた。

注7) 歴史的建造物の判定が、傍観できる範囲からであること。また戦前の建物なのかについては、棟札でもない限り正確に把握できないこと。さらに歴史的建造物の数が多く、全て年代の特定は困難であることから、把握し

た歴史的建造物の数を「推定した」という表現を用いている。

注8) 下屋の有無を指標として用いるのは、特定の地域で下屋の無い形態、または下屋がある形態が特徴であると思われる歴史的建造物が見られたため、本研究では景観上重要な指標として用いている。

注9) 道路側の棟が横屋で、奥側の棟が堅屋をしており、建物の外形が長方形である形態は丁字造りと呼ばれ、新潟町屋によく見られる。また同じように道路側の棟が横屋で奥側の棟が堅屋をしており、建物の外形が丁字型である形態は撞木造りと呼ばれ、米沢街道沿いによく見られる。本研究では、道路側の棟が横屋、奥側の棟が堅屋と同じ特徴を持つことから、これらを同分類とし、その棟の向きを横堅混在とした。

注10) 17代から明治維新まで村上城主は内藤氏の治世が約140年続いた。

注11) 文献9) p27～p30で18世紀後半から19世紀初期において庄屋を務めた家を始めとして広まり始め、増築を機に堅屋だった家の通り側の部分を屋根を変え横屋にするようになったと述べている。

#### 参考文献

- 1) 大場修「近世近代 町家建築史論」中央公論美術出版, 2004. 12
- 2) 西村伸也, 廣江真治, 千々石佳弘「新潟県の町家における空間構成の特徴と

そのしくみ—高田・白根・栃尾の「ヒワアイ」「ダシアイ」「クイアワセ」の使われ方と共用のしくみ」日本建築学会計画系論文集, No.467, p71, 1995. 1

- 3) 鈴木哲, 山崎完一「新潟県の町家の妻入り・平入りに関する調査研究 その1 その2」日本建築学会大会学術講演梗概集, pp71-74, 1985. 8
- 4) 小村式監修「図説 新潟県の街道」郷土出版社, 1994. 12
- 5) 文政元年(1818)「越後奥地全図」新潟県立図書館所蔵
- 6) 加藤貞仁「北前船 寄港地と交易の物語」無明社出版, 2002. 10
- 7) 村上市教育委員会「村上市史 通史編2 近世」, 1999. 2
- 8) 財団法人日本ナショナルトラスト「村上の町屋と町並み景観」, 2003. 3
- 9) 財団法人日本ナショナルトラスト「撞木造りの町並みと米沢街道—新潟県関川村の村づくり—」, 1988. 3
- 10) 慶長2年(1597)「瀬波郡絵図」米沢市市立上杉博物館所蔵
- 11) 佐藤憲明, 岡崎篤行「城下町村上の旧町人町における歴史的建造物の現存状況」日本建築学会大会学術講演梗概集F1, pp493-494, 2002. 8
- 12) 宮腰将義, 佐藤憲明, 岡崎篤行「新潟県神林村塩谷における伝統的町家および町並み景観の特性」日本建築学会大会学術講演梗概集F1, pp215-216, 2003. 9

(2006年3月10日原稿受理, 2006年8月28日採用決定)